

新生 MINNANO MUSLIM NEWS PAPER

ムスリム新聞

西暦2019年 8月20日

ヒジュラ暦1439年 ズー・アル=ヒッジャ月

321号

アッサラームアライクム（皆様に平安がありますように）。

「ムスリム新聞」をダウンロードしていただき、ありがとうございます。
暑さの峠を越しつつありますが、ミンミン蝉はさかんに家のすぐそばの木で鳴いています。冷たい麦茶を飲みつつ新聞をお読みください。

目次

- クルアーン解説 第40章 [赦す御方] 60節 (16) 2—5頁
- 東南アジアのシャーフィイー学派 (29回) 6, 7頁
- ジャワ島のシャーフィイー派6
- イスラームの風 8—10頁
- アーシューラーウの断食
- クルアーン無料レッスンのお知らせ
- イスラーム復興運動の背景と構図 (4) 11—15頁
- 3. イスラーム復興の展開
- 📖本の宣伝 松山洋平『イスラーム神学古典選集』（作品社）
- イスラーム学習 16、17頁
- アッラーの書
- 編集後記 18頁

クルアーン解説

第40章 [赦す御方] 60節 (16)

慈悲あまねき慈悲深きアッラーの御名において。

そしておまえたちの主は仰せられた。「われに祈れ、そうすればわれはおまえたちに応える。われの崇拝に思い上がった者はいずれ卑しめられて火獄に入る」。(40:60)

クルアーンの部分は、『日垂対訳クルアーン』（作品社）を参照しています。

★ジャラーライン（『ジャラーラインのクルアーン注釈（Tafsīr al-Jalālain）』 ジャラール・アッ＝ディーン・アル＝マッハリー（ヒジュラ暦864年没）とジャラール・アッ＝ディーン・アッ＝スユーティー（ヒジュラ暦911年没）著）（参照：『タフスィール アル＝ジャラーライン』第3巻、中田香織（ハビーバ）訳中田考（ハサン）監訳、日本サウディアラビア協会、2006年。）

『ジャラーライン』はクルアーンの読誦法としてワルシュ&ナーフィウを採用しています。

★イブン・カスィール（『イブン・カスィールのクルアーン注釈（Tafsīr Ibn Kathīr）』イブン・カスィール（ヒジュラ暦774年没）著）

★クシャイリー（『精妙なる示唆（Latā'if al-'ishārāt）』クシャイリー（ヒジュラ暦465年没）著）

※文中のひらがなの「かれ」はすべて「アッラー」を指します。

そしておまえたちの主は仰せられた。「われに祈れ、そうすればわれはおまえたちに応える。われの崇拝に思い上がった者はいずれ卑しめられて火獄に入る」。(40:60)

★ジャラーライン

『われに祈れ、そうすればわれはおまえたちに応える。』つまり、われに仕えよ、そうすれば、その帰結として、われはおまえに報いる。

『卑しめられて』蔑まされて。

『いずれ入る』のアラビア語「sa-yadkhalūna」の三人称男性形複数形はヤーウ（y）を母音aで、ダー（d）を母音をなして、ハー（kha）を母音uで読みます。また、その反対の読み方もあります。（つまり、「sa-yudkhalūna」と読み、「入れられる」という意味です。）（訳者注：『sa-yudkhalūna（入れられる）』と読むのは、イブン・カスィール、シュウウバ [双]、アブージャアファル、ルワイスの読誦法です。ただし、ここでのイブン・カスィールは、クルアーン解説で訳されているイブン・カスィールとは別人です。詳しくは、松山洋平「クルアーン正統十読誦」『日垂対訳クルアーン』を参照ください。）

★イブン・カスィール

この節では、アッラーが、かれの恵みと寛容さゆえに、かれへの祈りをしもべに勧め、そして、かれの返答を彼らへ保証し給うています。

スフヤーン・アル＝サウリー（ヒジュラ暦 161 年没）は「しもべに対して、かれ（アッラー）にお願いすること、そのようにお願いを何度もすることを喜ぶ御方よ。また、しもべに対して、かれにお願いをしないことを、嫌う御方よ。（わが）主よ、そのような者はあなた以外にはいない。」と言いました。

イブン・アビー・ハーティムもこれを伝え、詩人が「アダムの子孫は、求められることを嫌うが、アッラーだけは、かれへの願いを私が止めてしまうことを嫌い給う。」と詠みました。

カタードは、カアブ・アル＝アフバル（西暦 660 年、ヒジュラ暦 32 年没）が、「この共同体は、それ以前の共同体が与えられず、（預言者ムハンマド以外の）他の預言者にも与えられなかった三つのものが与えられた。アッラーは、預言者を遣わし給うた時、彼には「おまえは、おまえの共同体に対する証言者である。」と仰せになり、そして、おまえたちを人間に対する証言者と定め給うた。また、かれは、彼（預言者）には「宗教においておまえに苦行はない。」と、そして、この共同体には『そして、かれは宗教においておまえたちに苦行を定め給わなかった。』（第 2 2 章 [巡礼] 7 8 節）と仰せになった。また、かれは彼には「われに祈れ、そうすればわれはおまえに答える。」と、そして、この共同体に『われに祈れ、そうすればわれはおまえたちに答える。』と仰せになった。」と言った、と伝えています。

これは、イブン・アビー・ハーティムも伝えています。

イマーム・アフマドは、ヌウマーン・ブン・バシール（アッラーの御満悦あれ）から、アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安あれ）が「まことに祈りとは、つまり、崇拜行為である。」と言われ、そして続けて『われに祈れ、そうすればわれはおまえたちに答える。われの崇拜に思い上がった者はいずれ卑しめられて火獄に入る。』と、クルアーンを詠まれたことを、伝えています。

そのように、アル＝ティルミズイー、アル＝ナサーイー、イブン・マージャ、イブン・アビー・ハーティム、イブン・ジャリールなどハディースについて権威を持つ者たちが、それを伝えています。

アル＝ティルミズイーは、「良好または真正（な伝承経路で伝わったハディース）である。」と言いました。（このハディースを）アブー・ダーウード、アル＝ティルミズイー、アル＝ナサーイー、イブン・ジャリールが、別の経路で伝えています。

『われの崇拜に思い上がった者』つまり、われへの祈りと、われのみを唯一の神として崇拜することについて（思い上がった者）、ということです。

『いずれ卑しめられて火獄に入る』つまり、卑しく、惨めに、ということです。

イマーム・アフマドは、アムル・ブン・シュアイブから彼の父から、そして彼の祖父を通じて、預言者が「復活の日、思い上がった者たちは、人間の形に、塵のようなものとして、集められる。あらゆる取るに足りないものよりも、彼らは卑しめられ、そして、ブーラスと呼ばれる火獄の檻に入れられる。灼熱の獄火は彼らを飲み込み、彼らは、火獄の山の土と獄火に焼かれた人々がペイスト状になったものを飲ませられる。」と言われたことを、伝えています。

★クシャイリー

つまり、「われに祈れ、そうすれば、われが望めば、われはおまえたちに答える」ということです。なぜなら、次の一節で、かれが『すると、かれは、望み給うたならば、おまえたちがそのために祈っているものを取り除き給う。』（第 6 章 [家畜] 41 節）と仰せになったからです。

また、別の説によると、「祈りの条件を伴って、われに祈れ。祈りの条件とは、合法の物を食べることである。」ということです。

また、説によると、「祈りの鍵（きっかけ）は必要（なものがあること）であり、その要綱は合法的な物を食べることである。」ということです。

また、別の説によると、「かれに祈る者に、彼が望むもの、もしくは、それよりも彼にとってより良い他のものによって、かれは必ず応え給う。」ということです。

また、別の説によると、「不信仰者はアッラーに祈らなかった。なぜなら、かれに並び立つものは本当はありえないにもかかわらず、かれに並べて（崇拝されて）いるものに彼は祈っているからである。」ということです。

また、別の説によると、「この一節は信仰者のためにある、と確定されたならば、信仰者がアッラーに祈り、何かお願いすれば、現世において、かれはそれを必ず彼に与え給い、来世において、『これは、おまえが現世で求めたものである。われは、この日のために、それをおまえに取り置いていた。』とかれは彼に必ず仰せになる。それで、しもべは、かれが現世でまったく何も与え給わなければよかったのにと、望む。」ということです。

また、別の説によると、「さまざまな敬神行為を行いつつ、われに祈れ。そうすればわれは、報奨（を与えること）と位階（を上げること）によって、おまえたちに応える。」ということです。

また、別の説によると、「不注意にならずわれに祈れ、そうすれば、遅くすることなく、われはおまえたちに応える。」ということです。

また、別の説によると、「（罪から）手を清めると共にわれに祈れ、そうすれば、喜んでわれはおまえたちに応える。」ということです。

また、別の説によると、「能力に応じてわれに祈れ、そうすれば、欠けているものを明らかにしておまえたちに応える。」ということです。

また、別の説によると、「願いつつわれに祈れ、そうすれば、さまざまな恩恵でわれはおまえたちに応える。」ということです。

『われの崇拝に思い上がった者はいずれ卑しめられて火獄に入る』とは、「われへの祈りに思い上がった者はいずれ見下されて火獄に入る」ということです。

見ようアラビア語

クルアーン第40章60節から

أَدْعُونِي أَسْتَجِبْ لَكُمْ.

(意訳) われに祈れ、そうすればわれはおまえたちに応える。

أَدْعُو + نِي ← أَدْعُونِي

(人称代名詞) (動詞・命令形)

われに祈れ

われに

祈れ

لَكُمْ

أَسْتَجِبْ

↓

لَنْ + كُمْ

(人称代名詞) (前置詞)

(動詞)

おまえたち

～に

私は応える

→われはおまえたちに応える。

東南アジアのシャーフィイー派 第 29回

— ジャワ島のシャーフィイー派 6—

アフマド塩崎悠輝

これまでの何回かは、ナワウィー・アル＝バンターニーという、19世紀に活躍したジャワ島出身のウラマーについて書いてきました。これから20世紀のジャワ島のシャーフィイー派のウラマーについて書いていきたいと思うのですが、その中でもっともよく知られているウラマーとして、ハーシム・アシュアリー（1871～1947）の名前が挙げられるであろうと思われます。今回から、ハーシム・アシュアリーについて書いていきたいと思うのですが、彼が有名なのは、ナフダトゥル＝ウラマーの初代総裁であったということが大きいでしょう。その立場があったために、彼の著作も広く読まれているということがいえます。20世紀のインドネシアのウラマーの間で、学識において誰が最も優れていたかという話は、また別に、いろいろな評価がありうるでしょう。ただし、ハーシム・アシュアリーはその最も優れているウラマーの中の一人であるということも広く認められていました。また、ハーシム・アシュアリーは、オランダに対する独立戦争に、プサントレンの人々を組織して参加させたことで、独立運動への功績も認められており、インドネシアの政府からも評価されてきた大きな理由になっています。

ウラマーの世間的評価は、どうしても学識だけではなく、どういう行いをしたのかということでも後世に伝わっていきます。ハーシム・アシュアリーの場合、政治的に大きな働きがあったということがいえますが、これは、彼が政治的な人物であったというよりも、時代の状況がそういう役割を彼に強く求めた、という面が大きいです。当時の時代の状況について知るために、今回は、ハーシム・アシュアリーより一世代上で、当時のインドネシアでは最も権力のあったウラマー、ウスマーン・ヤフヤ（1822～1913）のことは見ていきたいと思えます。

ウスマーン・ヤフヤは、サイド・ウスマーン・アル＝ブタウィーとも呼ばれます。「ブタウィー」とは「バタヴィアの」という意味のアラビア語です。バタヴィアというのは、現在のインドネシアの首都、ジャカルタのことで、オランダの植民地統治下ではそのように呼ばれていました。第二次世界大戦中の日本軍の占領下で、ジャカルタという名前に変わりました。ウスマーンは、ジャカルタで生まれ、ジャカルタで活動したので、アル＝ブタウィーと呼ばれます。両親ともアラブ人で父親も祖父もマッカで活動していました。東南アジアの歴史では、マッカやエジプトから移住してきて、ムフティーやカーディー（裁判官）などの職に就いた人たちが多数います。

ウスマーンは、「バタヴィアのムフティー」という職に就いていました。これは、当時インドネシアを支配していたオランダ植民地当局に任命されたもので、月給ももらっていました。また、ウスマーンは、「アラブ人間

題名誉顧問」という別の職でも、オランダに雇われていました。19世紀には、ロシアやアルジェリアなど、非ムスリムに植民地化された諸国で、植民地当局によってムフティーやカーディーなどが任命される、ということが起きていました。なお、ロシアやフランと違って、英国による植民地統治下では、スルターンと呼ばれるような統治者を名目上だけ温存して、彼らにムフティーやカーディーを任命させる、という方法をとりました。

異教徒がムフティーやカーディーを任命することの是非、また、そうやって任命されたカーディーなどがムスリムの結婚の契約を取り仕切った際の、結婚の有効性の是非、などは、当時のイスラーム世界のあちこちで議論されました。この問題は、植民地支配が終わってムスリム諸国が独立したからといって、消えて無くなった問題ではありません。たとえば、今のヨーロッパで起きていることですが、ヨーロッパ各国の政府は、モスクのイマームなどを、政府が任命するようにしようとしています。マイノリティとして定住しているヨーロッパのムスリムが、自分たちの閉鎖的な社会をつくることは望ましくないと考えられているからです。ヨーロッパ諸国の政府は、そういった人事を管理することで、ムスリム社会を統制しやすくなると考えています。

「バタヴィアのムフティー」ウスマーン・ビン・ヤフヤの著作が広く読まれ、現在まで残っているのは、彼が自分の出版社を経営していたことにもよります。また、アラブ人としての人脈を生かして、学校をつくったこと、各地で勉強会を組織したことも、彼の影響力を広げました。しかし、彼の権力が際立って大きかったのは、やはりオランダ植民地当局との密接な関係によるものでした。ウスマーンは、ジャワ島西部のバンテンやスマトラ島のアチェで起きていたオランダに対する抵抗運動について、「ジハードではない」というファトワーを出し、オランダによる植民地支配を正当化しました。

ウスマーン・ビン・ヤフヤは、確かに学識があり、教育や出版で大きな働きをした人ですが、現在のインドネシア政府から高く評価されている人ではありません。別に政府から高く評価されれば偉いウラマーという訳ではありませんが、ハーシム・アシュアリーは、現在のインドネシア政府から最も高く評価されているウラマーといえるでしょう。それは、彼が人生の半ばをマッカで送りながら、20世紀の初め、インドネシアが独立運動に向かっていく時代に生きて、大きな役割を果たしたことによります。

今回は、ハーシム・アシュアリーがまだマッカで生活していた頃、彼の人生と彼が置かれていた状況、マッカのインドネシア人コミュニティについて書きたいと思います。

続く、インシャーアッラー。

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において
イスラームの風 NASIM ISLAM

著：イーマーン・アル=キッル先生

訳：ダマスカス留学生有志



【アーシューラーウの断食】

アッサラーム アライクム ワ ラフマトッラーヒ ワ バラカートフ

親愛なる皆様に、ヒジュラ暦（イスラーム暦）のムハッラム月9日目（タースーアーウ）と10日目（アーシューラーウ）の断食について、リマインドさせていただきます。

この2日間の断食の推奨に関し、私たちの愛する預言者様（彼の上にアッラーの祝福と平安あれ）のハディースが多数述べられています：

—アブドゥッラーヒ・ブヌ・アッバーズ様（彼らにアッラーのご満悦あれ）の伝えるところによると：アッラーの使徒様（彼の上にアッラーの祝福と平安あれ）がアーシューラーウの日に断食をされ、その断食を命じられた時に、彼らは言いました：「アッラーの使徒様、本当に、それはユダヤ教徒達やキリスト教徒達が偉大視している日です。」

するとアッラーの使徒様（彼の上にアッラーの祝福と平安あれ）は仰いました：«もし来年になったら、インシャーアッラー（アッラーのご意思があれば）、私達は、9日目も断食をしましょう。

»・・・。ムスリムの伝承

別の伝承ではこうあります：«もし私が来年まで生きていたなら、必ずや9日目も断食をしましょう。

≫ムスリムの伝承

—アブ・カタダ様（彼にアッラーのご満悦あれ）の伝えるところによると、アッラーの使徒様（彼の上にアッラーの祝福と平安あれ）は仰いました：「アーシューラーウの日の断食がその前年の罪の償いになる事をアッラーに願います。」≫ムスリムの伝承

—アイシャ様（彼女にアッラーのご満悦あれ）の伝えるところによると：クライシュ族はジャーヒリーヤの時代（訳注：イスラーム以前の時代。無明時代）に、アーシューラーウの日の断食をしていました。それから、アッラーの使徒様（彼の上にアッラーの祝福と平安あれ）は、その断食を命じられ、やがてラマダーン月の断食が義務化されると彼（彼の上にアッラーの祝福と平安あれ）は仰いました：「望む者はその日の断食をしなさい、又、望む者はその日の断食を破りなさい。」≫アル＝ブハーリーとムスリムの伝承

—イブヌ・アッバース様（彼らにアッラーのご満悦あれ）の伝えるところによると、彼は言いました：「この日つまりアーシューラーウの日と、この月つまりラマダーン月以外に、預言者様（彼の上にアッラーの祝福と平安あれ）が他の日よりも好まれてその日の断食を求められるのを私は見た事はありませんでした。」≫アル＝ブハーリーとムスリムの伝承

—ジャービル・ブヌ・サマラ様（彼にアッラーのご満悦あれ）の伝えるところによると、彼は言いました：「アッラーの使徒様（彼の上にアッラーの祝福と平安あれ）は、アーシューラーウの日の断食を私達にお命じになり、私達にそれを奨励し、その際に私達（の断食）に細心の注意を払っていらっしゃいましたが、ラマダーン月の断食が義務付けられると、（アーシューラーウの断食を）お命じになる事も、禁止されることもなく、私達の様子に細心の注意を払われる事もありませんでした。」≫ムスリムの伝承

訳注：学派によっては、ムハッラム月9日目に断食をしなかった場合、10日目と11日目に断食をすることも可能です。

【クルアーン無料レッスンのお知らせ】

ダマスカス留学生有志

アッサラーム アライクム ワ ラフマトウツラーヒ ワ バラカートウフ

まだアラビア語でクルアーンを読んだことがない方に朗報です！スカイプや Facebook、ライン、ワッツアップなどのオンラインの音声チャットによる、プライベートレッスンに無料でご参加いただけます。

★日時：一対一のプライベートレッスンなので、ご自分のペースで始められます。

時間帯・頻度については先生とご相談の上決めていただけます。(使用言語：日本語)

土日、平日、朝、夜、昼間、週何回、いろいろ対応可能。

一回 10 分くらいからのすき間時間でもステップアップ可。

★参加費：無料

★対象：以下の項目に一つ以上当てはまる方（ムスリマ女性限定）

- ・アラビア文字は一文字も読んだことがない
- ・美しいアラビア語の発音を身に付けたい
- ・クルアーンを詠んで、胸の中にある病を治したい
- ・まとまった時間はとれないので、ちょっとした隙間時間でうまくなりたい
- ・クルアーンをもっとスラスラ読めるようになりたい
- ・預言者様（彼の上にアッラーの祝福と平安あれ）の読み方、タジュウィード(クルアーン読誦法)を身に付けたい
- ・アッラーからの導きと慈悲を受け取りたい
- ・自分のペースで、少しずつアラビア文字を覚えたい
- ・もっと預言者様（彼の上にアッラーの祝福と平安あれ）の読み方に近づきたい

クルアーン {人々よ、あなた方の主から確かに勧告が下された、これは胸の中にある（病）を癒し、又信者に対する導きであり慈悲である。...} [ユースス章：57-58]

★申込み方法：welove.allah@hotmail.com 宛に、件名を「レッスン希望」として、メールをお送りください。折り返し、先生の方から返信をお送りします、インシャアッラー。

アッラーが、私たちの人生を、クルアーンで飾ってくださいますように

ワッサラーム アライクム ワ ラフマトウツラーヒ ワ バラカートウフ

イスラーム復興運動の背景と構図 (4)

3. イスラーム復興運動の展開

(1) スンナ派反人定法論

1960年代にはアラブ社会主義とのイデオロギー闘争の中で、社会主義のみならず西欧法を継受した近代国家体制そのものを否定する理論が定式化された。これが「人間の作った法律による支配は神の主権の否定であり背教にあたる」との反人定法論である。

学界における反実定法論の先駆者はサウディアラビアの王国ムフティー（最高法官）ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・アル＝シャイフ（1969年）であった。

アル・アル＝シャイフは、イスラーム法に則って統治をおこなわない者はムスリム共同体から「破門」される不信仰者であるとする。彼はフランス法や英米法などを継受した実定法を立法の法源とし人々に強制的に適用することを、イスラーム法を拒みアッラーフ（イスラームの神）とその使徒に反逆する最も明白で包括的な最悪の形態であると述べ、「この『不信仰』にまさる『不信仰』があろうか」と断罪した。

アル・アル＝シャイフの実定法批判は、イスラーム法に則る統治を建前とするサウディアラビアのムフティーとしての、共和制諸国に対する、いわば外からの批判であった。

ところがアラブ社会主義体制をとるエジプトにあって内側からこれを批判したのが、創設者ハサン・アル＝バンナー亡き後の「ムスリム同胞団」最大のイデオログであったサイイド・クトゥブ（1966年没）の「ジャーヒリーヤ論」であった。クトゥブによると、イスラームとはアッラーフのみに「統治権」を帰すること、具体的にはイスラーム法の完全な施行を意味する。統治権がアッラーフのみに帰されない、つまり立法権が人間の手に握られている状態は、人間の人間に対する隷属を意味する。彼はそれをイスラームに対立するものとして、「ジャーヒリーヤ（無明）」と呼び、「イスラーム世界」の現状をジャーヒリーヤと断じた。イスラームとジャーヒリーヤの二文法を掲げる「ジャーヒリーヤ論」は権力者にとって極めて危険なものであった。それゆえ彼の影響力を恐れた時のエジプトの大統領ナセルにより、1966年、クトゥブは国家転覆容疑によって処刑されたのである。

(2) スンナ派イスラーム復興運動の分極化

アラブ社会主義とのイデオロギー闘争を通じて、西欧法を継受したアラブ社会主義体制の反イスラーム性の理論的認識が深まったが、イスラーム主義者に対する投獄、拷問、虐殺、処刑といった現実の対応は、その認識を強化するものであった。また中東の政権は例外なく軍事独裁政権であり、宗教・言論は政府の完全な統治下であり、イスラーム主義者には平和的手段による政権獲得の道は完全に閉ざされていた。

こうした状況下でスンナ派イスラーム復興運動は、漸進的に個人のイスラーム化、社会のイスラーム化、国家のイスラーム化を目指す改革派と、国家のイスラーム化には武力革命が必要であるとする反体制武装闘争派に分極化していった。

そしてアラブ社会主義の自壊に伴いイスラーム主義への弾圧が相対的に緩和された中で、改革派、武装闘争派双方によって社会のイスラーム化が進められていった。

本来、イスラームは学問であるため、イスラームへの弾圧が緩めば、学問の論理に従って、学問的に正しいイスラーム理解が進歩する。イスラーム復興運動の興隆の主たる原因は学問の進歩と大衆化にある。

学問の進歩と民衆のイスラーム化を媒介したのが、学校などの公教育と、モスクなどの非公式教育である。両者は重なる部分もあったが、公的教育は国家の統制下にあるため基本教義と私的宗教儀礼の教育に偏る傾向があったが、比較的自由的なモスク教育は、社会倫理など実践的な問題をも教え、モスク教育を基礎にそこで男性の顎鬚（預言者ムハンマドに倣って男性の威厳のしるしとされる）、女性のヒジャーブ（ベール）、男女の隔離といった風俗、社会倫理のイスラーム化が進行した。

スンナ派のイスラーム主義の担い手は主として「俗人」であった。彼らは各自の職業を通じて社会のイスラーム化を計った。中でもエジプトでは相対的自由期に大学学生自治会、職業組合のイスラーム化が進み、1980年代には大学の学生自治会と医師組合、技師組合、弁護士組合などの職業組合の大半がムスリム同胞団の支配下に入った。漸進改革派は勉強会の中で民衆の強化と共に、モスクに付属する病院を建て貧者に無料の診察を行うなど、社会奉仕活動を通じて民衆の支持を集めていった。

(3) 革命のジハード論

クトゥブは、イスラームとジャーヒリーヤ（無明）を二項対立的に把握し、ジャーヒリーヤとの妥協は許されず、ジャーヒリーヤを克服しイスラーム社会を再建するためには、ジハード（聖戦）が必要不可欠であるという。なぜならイスラームが解放の教えである以上、イスラームの信仰の自由が確保されるためには、先ず人間の人間に対する支配—隷属関係が打破されねばならず、それには言論による論証のみでは足りず、体制変革の革命のための「運動」が組織される必要があるからである。

クトゥブのジャーヒリーヤ社会論の現状認識と体制変革への訴えを、既述のアール・アル＝シャイフの反実定法論、イスラーム法に背く統治をおこなう為政者とのジハードを命ずる中世の法学者イブン・タイミーヤ（1328年没）のファトワー（法判断）と接合して、革命のジハード論を法学的に定式化したのが、イスラーム集団のウマル・アブド・アル＝ラフマーン、ジハード団のアブド・アル＝サラーム・ファラジュらエジプトのジハード連合のイデオログたちの理論的作業であった。

シャリーア（イスラーム法）以外の人定法の施行は背教にあたる

→ したがって人定法を施行する為政者はムスリムではなく背教者である

- 背教の為政者に対してはジハードが義務となる
- ところが現在の「ムスリム諸国」の支配者たちは人定法を施行している
- それゆえ既存の全ての体制のジハードによる打倒が義務となる

との理論が革命のジハード論の骨子である。

革命のジハード論は1970年代後半に輪郭が固まったが、この革命のジハード論が、その後のスンナ派世界における反政府武装闘争の基礎理論となる。

(4) シーア派「法学者による後見」論からイラン・イスラーム革命へ

こうしてスンナ派世界で革命のジハード論の理論家が進みつつあるころ、シーア派世界では、イランを追放され1965年にイラクのシーア派聖地ナジャフを亡命先に定めたアーヤ・アッラーフ・ホメイニーが王制の打倒とイスラーム法学者の直接統治の必要性を説く「法学者による後見」理論を編み出していた。

ホメイニーは、シーア派信徒の唯一の正当な指導者であるイマームの不在中は法学者こそがその代理人である以上、イスラームは王制を認めていないと言う。シーア派では宗教弾圧の下では「タキーヤ（信仰を隠すこと）」が許されている。しかしイスラーム社会そのものが危機に瀕している場合には、「タキーヤ」は許されず、パーレヴィー帝政は西欧の手先となりイスラームを滅ぼそうとしている以上、これを打倒し、法学者が直接政治の監督にあたるイスラーム共和制を樹立しなくてはならないとホメイニーは説いた。

ホメイニーは世界に広がるシーア派のウラマーウ・ネットワークを通じてイラン帝政打倒派の組織化に成功していた。そして1979年にはイランではイスラーム世界で初めての民衆革命によってパーレヴィー朝帝政は倒れ、イスラーム革命により、「法学者による後見」理論に立脚するイスラーム共和国が樹立された。

(5) シーアは世界へのイラン革命の影響

アラブ社会主義とのイデオロギー闘争期には、国家レベルにおける世界のイスラーム運動の盟主はワッハーブ派宣教国家サウディアラビアにおいて存在しなかった。

ところがイラン・イスラーム共和国の成立以降は、スンナ派のワッハーブ派宣教国家サウディアラビアとイラン・イスラーム共和国が主導権を争うという国際イスラーム運動の基本構図ができあがる。

イランはイラン・イスラーム革命をイラン一国を超えるイスラーム革命と位置づけ、イスラーム革命の輸出を目指した。いわゆる「革命の輸出」戦略構想に基づきイランは「世界イスラーム解放運動機構」を組織したが、この組織にはイラクとクウェイトのダウワ（宣教）党、バハレーンのイスラーム解放戦線、サウディアラビアのアラビア半島イスラーム革命組織、レバノンのヒズブッラー（神の党）、イスラミック・アマルなどが加入し、各国のシーア派イスラーム主義反体制派の指導者たちがイランを活動拠点に定めることになった。イラン革命の影響の下に1979年にはサウディアラビア、バハレーン、クウェイトなど多くのシーア派住民を抱える湾岸諸国

ではシーア派の待遇の改善を要求するストライキやデモが頻発した。スンナ派政権は弾圧をもってこれに応じたため、湾岸諸国では1982年のバハレーンのシーア派反体制組織によるクーデター未遂事件、1979年のメッカ巡礼団爆破事件などシーア派による反体制活動が続けられている。

またイラクではシーア派住民の間で大きな影響力を有したアーヤ・アッラーフ・ムハンマド・バーキル・アル＝サドルが「法学者による監督論」を受容したが、イスラーム革命の波及を恐れるバース党政権は1980年、アル＝サドルを処刑する。

イランの「革命輸出」が大きな成功を収めたのはレバノンのシーア派の政治組織化である。レバノンでは、ヒズブッラー、イスラミック・アマルなどシーア派が民兵団を結成し大きな政治勢力となった。レバノン南部を占拠していたイスラエル軍を撤退させる大きな成果をあげた。

(6) スンナ派世界におけるサウディアラビアのヘゲモニー

イラン・イスラーム革命の成功は、スンナ派世界にも大きな衝撃を与えた。サウディアラビア、バハレーン、クウェイトなどシーア派住民が政治、社会、経済的に差別を被っている湾岸諸国ではイラン革命に触発されたシーア派住民によるストライキやデモが頻発し、国家統合が脅かされた。また宗教界の反応としては伝統的にシーア派を異端として敵視するワッハーブ主義は、イラン革命による革命輸出を「シーア派の伸張」の脅威とみなした。

イラン革命はイスラーム革命であると同時に、王制の打倒を目指す共和革命であり、イランを超えて全てのムスリムに王制の打倒を呼びかけた。そして1979年にはイラン革命に呼応するかのようにサウディアラビアでワッハーブ派の中からもサウディ王制を否定しイスラーム国家の樹立を目指したメッカ・カアバ神殿占拠事件が起きた。そこでサウディアラビアを筆頭とする湾岸の王制諸国は、王制批判の国内への波及防止のため、イラン一国内に革命を封じ込める方策をとった。

このようにイランの驚異の認識において国家と宗教界の利害は一致したため、湾岸諸国はイラン革命とのイデオロギー闘争に際して、国内的にはシーア派嫌いのワッハーブ派宗教界を優遇し積極的に利用すると共に、ラービタ（世界ムスリム連盟）などの配下の国際イスラーム団体を通じて世界のイスラーム運動を支援し、イランに對抗してイスラーム世界の盟主の地位の確保をはかった。

また武装闘争に関しても「革命ジハード論」の代表的イデオログでありサウディアラビアでの教職を終え帰国したウマル・アブド・アル＝ラフマーンの指導するイスラーム集団とジハード団の合作になる「ジハード連合」が1981年にサダト・エジプト大統領を暗殺した。またシリアではシーア派の分派の「異端」アラウィー派出身のアサドのバース党独裁政権に対し、ムスリム同胞団が1976年ころから武装闘争を始めており、1981年にハマで大規模な武装蜂起を行ったが鎮圧され、数万人とも言われる犠牲者を出してシリア国内の同胞団は壊滅した。エジプトにおけるジハード連合によるサダト暗殺、シリアのムスリム同胞団によるハマ蜂起はいずれも政権奪取

に成功せず失敗に終わり、両国のイスラーム主義武装闘争派は徹底した弾圧を被ったが、殺害、逮捕を免れた武装闘争派の多くはサウディアラビアに亡命する。折からサウディアラビアはアフガニスタン・ジハード支援の環として、本国で弾圧されたアラブ人反体制イスラーム主義武装闘争派をアラブ・ムジャーヒドゥーン(義勇兵)として組織化し、パキスタンのペシャワール経由でアフガニスタンの反共ジハードに送り込んだ。この「アフガン・コネクション」の形成の主役の一人がサウディアラビア最大のゼネコンであるビン・ラーデン財閥のウサーマ・ビン・ラーデンであった。またスーダンで1986年にイスラーム主義に好意的なウマル・バシル將軍の率いるクーデターが成功し、イスラーム主義の伸張の足かせがなくなると、ハサン・トラビーの指導するイスラーム救国戦線によってスーダンの政治・社会の漸進的イスラーム化が始まった。ところがイスラーム救国戦線を財政的に支援したのもビン・ラーデン財閥などのサウディアラビアのイスラーム主義者であった。

■本の宣伝

松山洋平訳著『イスラーム神学古典選集』(作品社)

「イスラームという宗教を信じる」ことについて、スンナ派の中のさまざまな考え方、そしてシーア派の中のさまざまな考え方に触れてみませんか。預言者ムハンマの時代から時が過ぎるにつれて、イスラームの知識を持った人々が次々と死んでいくために、イスラームについての知識は失われていきます。この本では、現代を過去に遡り、今よりもずっとイスラームの知識が広く深く理解されていた時代に書かれた本が翻訳されています。先月のムスリム新聞でも取り上げた、シーア派の高名な学者ヒッリーの本も翻訳されており、イマーム論だけではなく、神についての考察がなされています。

本の最初に、この本を読むための手引として、基礎的知識がまとめられていますが、その中で、イスラームの教えの根幹であるタウヒード(唯一神信仰)について触れられており、タウヒードとは創造者と被造物を峻別することであると述べられています。創造者と被造物を分けるためには、どういうものが創造者で、どういうものが被造物なのか知らなければなりません。学者たちが語る言葉にそっと耳を傾け、アッラーを信じることを深めてみませんか。

『イスラーム^{がくしゅう}学習Ⅰ』

著者^{ちよしゃ} アブドル・アジーズ
訳者^{やくしゃ} ハビーバ^{なかつたかおり}中田香織

9. ムスリムの^{むすりむ しんこう}信仰

信仰^{しんこう}とは、なにかを^{かんぜん}完全に信じることです

信仰^{しんこう}とは、なにかを^{しんじつ}真実だと^{かくしん}確信することです

信じる^{しんじる}とは、^{うたが}疑いをはさまずに^{うけいれる}受け入れることです

ムスリムは^{つぎ}次のことを信じます

- 1 アッラー
- 2 天使^{てんし}たち
- 3 アッラーの^{かみき}啓典
- 4 使徒^{しと}たち
- 5 審判^{しんぱん}の日
- 6 宿命^{しよくめい}、それは、良いことも悪いこともみなアッラーから来ていると信じることです

れんしゅう
練習

1. 次の文章を完成させなさい

ムスリムは _____

_____ を信じます。

(6つの言葉を入れなさい)

編集後記

アッサラームアライクム（みなさんに平安がありますように）

イードムバーラク！犠牲祭おめでとうございます。預言者イブラーヒームに、彼の息子を犠牲に捧げよ！とアッラーが命令されたことにちなんでいる日です。イブラーヒームはアッラーからの命令を守ろうと息子にナイフを向けますが、アッラーはそのイブラーヒームの深い信仰心を認め、寸前のところで息子の代わりに羊を犠牲にするよう言われました。この日屠られた羊は、貧しい人や食べ物がない人に配られます。この話に関係しているか、どうかは分かりませんが、先日、クルアーンのパラド章（第90章 [バラド：国]）にも、弱い立場にあるひとに関心を持つようにアッラーが呼びかけられていました。

『それなのに、彼は険しい山路に踏み入ろうとしなかった。』（90：10）の「険しい山路」は、困った人や、貧しい人への献身であると、次の節で語られています。「アッラーを畏れよ！」とクルアーンの中でも、金曜礼拝の説教の中でも言われます。預言者の言葉で「人が帰依する中の美德の中には、関わりのないことを放っておくことがある。」（黒田壽郎『40のハディース』42、43頁参照。）

日々の生活の中で、近所の人や、こどもの学校の先生とか、どうやってコミュニケーションを取ったらよいか、よくわからず、気分が滅入ることがあります。今年は、小学校のPTAの役員になったため、学校の行事に参加することも多く、月1で朝は学校の校門に立ってこどもに挨拶をする活動もあり、地域の方々や学校の先生と会う機会も通常よりぐっと頻度が増えました。こんなことをしたら失礼だろうか、とか、こういうことを言ったらまずいかな、と気を使ってとても疲れます。けれど、アッラーのこと言葉を聞き、元気で仕事もできてそれなりに良い生活をしている人とのことをあれこれ悩んでもしかたのないことだし、そもそも私が関心を持つ必要のないことだったと気が付きました。アッラーは、弱い人との関係を心配するように命じられました。日常生活の中で、いらぬ心配が減り心が軽くなりましたが、これまで見落としていたじぶんに関係していることに目を開いていきたいです。アッラーの援けがありますように。アーミン。

ワッサラームアライクム　ワラフマトウッラーヒ　ワバラカートゥフ（あなたがたに平安と、アッラーの慈悲と、かれの恵みがありますように）　アーリファ松山